

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：12602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720079

研究課題名(和文)『懐風藻』諸伝本および本文に関する基礎的研究

研究課題名(英文)The Research of Traditional Texts of Kaifuso

研究代表者

土佐 朋子(Tosa, Tomoko)

東京医科歯科大学・教養部・准教授

研究者番号：00390427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円、(間接経費) 330,000円

研究成果の概要(和文)：23本の『懐風藻』写本についてほぼすべての調査を行い、同時に新たに12本の『懐風藻』写本を紹介した。その結果、これまでの群書類従系統とその他の系統に区分する考え方を改め、群書類従に至るまでの本文系統、すなわち江戸期の書写活動の過程における本文派生状況を明らかにする必要性を指摘した。とくに、江戸初期の林家における書写活動の過程で、複数の本文が生じた可能性を指摘した。また、現存最古の注釈書『懐風藻箋註』を翻刻し、その作者今井舎人が系譜学者鈴木真年であることを確定し、歴史的関心から施される江戸期版本書入と比較して、漢籍に典拠を求める注釈姿勢の異質さを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I researched about 35 manuscripts of Kaifuso, including 12 manuscripts that I discovered and referred on some papers. It is my belief that the accepted practice of classifying the texts as Gunnsho-ruijyu or other manuscripts is wrong, due in part to the hard copying of Kaifuso led by the Tokugawa Shogunate, daimyo, and learned people in the early stage of the Edo era. Especially, Hayashi families transcribed manuscripts multiple times, making subtle changes on each occasion, and as a result, multiple texts of Kaifuso came into being. Then, Imai-Shajin who is the author of Kaifuso-senchu was identified with Suzuki-Matoshi. Kaifuso-senchu is the oldest annotation of Kaifuso in ones that is discovered now, which was edited in the end stage of Edo era. In edo era, Kaifuso was studied from the interests in Japanese history. But, Imai-Shajin annotated on Kaifuso with the interests in relation between Chinese literature and Japanese Chinese poems.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：上代文学 漢文学 『懐風藻』 『懐風藻箋註』 今井舎人 鈴木真年 林家

1. 研究開始当初の背景

『懐風藻』は、同時代の文献である『古事記』『万葉集』などと比較して、注釈書数や作品論も少なく、研究の立ち後れが指摘されてきた。

その最大の原因は、『懐風藻』の書誌学的研究が進んでいないことにある。そのため、伝本系統が不明のままとなっており、最善本文が未だ確定できず、流布本に頼る状況にある。近年池田亀鑑以来の最古本・流布本を重視する方法から諸本比較によって善本を決定する方法へと移行している中で、研究開始当初の『懐風藻』の文献学的・書誌学的研究は大きな遅れをとったまま、研究そのものが停滞している状況にあった。

研究開始当初における最新の伝本研究成果は、沖正光「懐風藻の諸写本」(辰巳正明編『懐風藻 漢字文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院、2000年)であった。そこに紹介された写本は23本であり、『国書総目録』記載の抄本とあわせると、24本の写本の存在が確認されていた。また、当時における最新の本文校訂の成果は、大野保『懐風藻の研究』(三省堂、1967年)を踏まえて行われた、小島憲之『古典文学大系 懐風藻 文化秀麗集 本朝文粹』(岩波書店、1964年)の本文校訂であった。その後、本課題の研究期間に辰巳正明『懐風藻全注釈』(笠間書院、2012年)が刊行されたが、本文に関しては特段の進展は確認できない。

沖氏論文に写本の紹介はなされていたものの、それらの成果が伝本および本文研究に活用される段階には至っていなかった。研究開始当初の『懐風藻』伝本および本文研究は、1964年段階の水準で留まっていたということができる。

伝本および本文の研究には、江戸期の版本書入の調査も必要である。研究開始当初は、田村謙治「懐風藻研究史 江戸版本の書入について」(『城南紀要』第8号、1972年8月)における紹介や、沖光正「伊藤坦菴書入本『懐風藻』についての一考察」(『懐風藻研究』第2号、1998年3月)における考察などの成果が出されていた。

しかし、それらが『懐風藻』伝本や本文の系統全体の考察に活かされるなどの発展的な継承は見られなかった。また、『懐風藻』最古の注釈書である今井舎人『懐風藻箋註』は、書名は知られていたが、未翻刻のままであったため閲覧が困難であり、『懐風藻』研究に活かされることもないままであった。筆者である「今井舎人」についても不明な点が多く、通説の鈴木真年説を否定する論も出される状況にあった。

このように、研究開始当初は、『懐風藻』の伝本研究は1964年で停滞していた状況にあり、江戸期版本書入や注釈書に関する研究も一部の紹介に留まっている状況にあった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、『懐風藻』の伝本系統を明らかにし、最善本文を確定し、『懐風藻』の書誌学的文献学的研究と作品研究の発展に必要な基盤を築くことである。

現在の研究は流布本に頼って行われている。その本文は、751年『懐風藻』成立から約900年も隔たった江戸期に作られたものであり、奈良朝期の原本の本文を忠実に伝えているのかどうか分からない。むしろ、『懐風藻』伝来や現存伝本の本文状況から考えると、かなり変容した本文であることが推測される。

『懐風藻』研究の発展のためには、そのような不確実な本文ではなく、確実性の高い本文に依拠した研究が可能にならなければならない。それにはまず、伝本系統と最善本文を明らかにすることが必要である。

さらに、本研究の目的は、日本最古の漢詩文集である『懐風藻』の江戸期に至る受容と伝来を明らかにすることにある。それによって、和文を中心として構築されている日本文学史に、漢詩文の歴史的脈が付与されることになり、文学史全体を今まで以上に包括的に構築できるようになる。

また、本研究は律令国家日本の8世紀における文学的営為の実態や文化的水準を明らかにすることも目的としている。『懐風藻』は8世紀東アジア文化圏に属する一員として、日本の知識人たる律令官僚が創作した漢詩文の成果である。その本文が明らかにされることによって、当時の日本における文学創作の実態と、国際社会の一員として自らの国家の文化形成を担った知識人たちの営為とを具体的に描き出すことができると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 下の資料を使用して、所在が確認できる伝本を整理する。

『国書総目録』『古典籍総合目録』。

大野保『懐風藻の研究』(三省堂、1957年)。

小島憲之、『古典文学大系 懐風藻 文化秀麗集 本朝文粹』(岩波書店、1964年)解題。

田村謙治「懐風藻の基礎的研究(諸本について)」(『城南紀要』第6号、1970年)。

足立尚計「懐風藻の諸本」(『皇學館史学』創刊号、1986年)。

沖光正「懐風藻の諸写本」(辰巳正明編『懐風藻 漢字文化圏の中の日本古代漢詩』笠間書院、2000年)。

国文学研究資料館古典籍総合目録データベース。

(2) 所在が確認された『懐風藻』伝本について、現地に赴いて調査を行う。

2010年度：静嘉堂文庫、内閣文庫、前田尊経閣文庫など都内各所および川越文庫など関東近郊。

2011 年度：天理大学附属天理図書館、京都大学附属図書館、大阪大学附属図書館など近畿地方およびその周辺。

2012 年度：松平文庫、祐徳稲荷神社など九州地方。

2013 年度：富山県立図書館、石川県立図書館など北陸地方および歴史民俗博物館など関東近郊。

(現地では伝本の書誌、保存状況、書写状況などをまとめ、その伝本の伝来を考察するのに必要な、所蔵機関に関する資料も収集する)。

- (3) 調査を行った伝本の書誌データをまとめ整理する。
- (4) 本文を複写または撮影によって収集し、収集した本文を、一行ごとに切り分けて貼り付ける。貼り付けた本文の文字の異同を表にしてまとめる。
- (5) 版本については、書入内容を収集する。

4. 研究成果

(1) 『懐風藻箋註』の翻刻と研究

『懐風藻箋註』は、元治2年(1865年)に今井舎人によって執筆された現存最古の『懐風藻』注釈書である。現在、静嘉堂文庫(函54架77)に写本が1本所蔵されている。沖光正『『懐風藻箋註』考』(『上代文学』第56号、1986年4月)・『『懐風藻箋註』考補遺』(『上代文学』第62号、1989年4月)に書誌や注釈傾向などについて紹介されたが、翻刻が発表されたことはなかった。

また、筆者「今井舎人」は『大日本人名辞書』の増訂5版(1903年)以来、系譜学者鈴木真年と同一人物とされ、大野保『懐風藻の研究』(三省堂、1957年)以下、従来それが踏襲されてきた。しかし、実はこの説明の根拠が明らかにされておらず、『国書総目録』に『懐風藻箋註』以外の今井舎人の著作物が見いだせないことから、沖氏の前掲論文ではその通説が否定され別人であることが論じられた。

本研究では、『懐風藻箋註』が江戸末期における『懐風藻』受容の一端を明らかにし得る資料であることと、今後の『懐風藻』研究にその注釈内容が踏まえらるべきであることを重視し、まず翻刻を発表し、今井舎人およびその注釈内容と姿勢に関する考察を行った。

翻刻は、2012年に『水門 言葉と歴史』第23号に解題とともに発表し、漢籍に典拠を求め、それを列挙する内容であることを明らかにした。

その後、同じく江戸期の河村秀根と慈本による版本への書入を2種類翻刻し、それらに加え既に川瀬一馬氏によって翻刻されていた狩谷掖齋書入を合わせた3種類と、『懐風藻箋註』の内容とを比較対照させた。それにより、版本書入3種類が主に日本史関係の和書によって施されていることから、江戸期には『懐風藻』は、歴史的関心にもとづいて受

容されていたと考えられ、そのような中で今井舎人の漢籍によって典拠を指摘しようとする注釈意識は極めて特異であることが明らかとなった。また、漢籍にその典拠を求める手法をとる現在の『懐風藻』研究は、この『懐風藻箋註』を継承するということもできる。

続いて、2013年には、早稲田大学図書館所蔵の穂積真香『真香雑記』(イ5-543)に「今井舎人」という号の記載を見出し、穂積真香が鈴木真年の別号であることから、今井舎人が鈴木真年であることを論証した。研究開始以来、静嘉堂文庫、東大史料編纂所、西尾市岩瀬文庫に所蔵される鈴木真年関係の資料の調査を継続する過程で、鈴木真年が多くの別号を使用していることに気づいた。その一つが穂積真香であった。『真香雑記』には鈴木真年という署名はないが、穂積真香という号によって鈴木真年の著作であることが判明し、そこに今井舎人と署名されていることから、今井舎人が鈴木真年の別号の一つであるという結論が得られた。

系譜学者として知られる鈴木真年が『懐風藻』に注釈を施したことを不審であるとする向きもあった。しかし、鈴木真年関係の資料を調査すると、その興味関心の対象が系譜のみに留まらないことがわかる。また、真年が系譜研究の大成を目指したきまじめな研究者ではなく、その本質は、興味の赴くままに資料を涉猟するその自由奔放さにあった。同時に、真年が生涯こだわったのは、鈴木穂積および新田今井源に連なるという過去に保証される自己の存在確認であり、真年は自分探しの系譜学者であるともいえる。

日本漢詩文の表現の典拠を列挙する『懐風藻箋註』は、そのような系譜だけに没頭するのではなく、興味の赴くままに資料を探索する真年が、漢籍の世界を逍遙したその結果をまとめたものであり、真年ならではの著作といえる。

(2) 『懐風藻』未紹介写本の発見と紹介

本研究の期間内に新たに紹介した未紹介写本は次の12本である。

- 広橋本(天理大学附属天理図書館蔵)
- 榊原本(京都大学文学研究科蔵)
- 遼寧本(中華人民共和国遼寧省図書館蔵)
- 川口本(石川県立図書館川口文庫蔵)
- 内山本(富山県立図書館内山文庫蔵)
- 田中本(国立歴史民俗博物館田中穰氏旧蔵典籍古文書蔵)
- 酒折宮本(早稲田大学図書館蔵)
- 明石本(国立歴史民俗博物館明石家資料蔵)
- 広大本(広島大学附属図書館蔵)
- 中尾本(三康図書館蔵中尾義稲旧蔵)
- 青木本(三康図書館蔵青木正児旧蔵)
- 佐藤本(佐藤信一氏蔵)

以上の12本について、所蔵機関での調査を行い、伝本および本文の特徴を考察して発

表した。

広橋本は、伊達本や不忍文庫本とほぼ同じ系統に属する。榊原本は、既に紹介されていた天理大学附属天理図書館所蔵の榊原本の忠実な転写本である。遼寧本は、塩竈神社本の転写本である。田中本は林家所蔵伝本の転写本であり、川口文庫本はその田中本の転写本である。酒折宮本、広大本、青木本、内山本は天和4年版本の転写本であり、明石本は寛政5年版本の転写本、中尾本は群書類従の転写本である。

広橋本、榊原本、遼寧本、田中本、川口本は版本刊行以前の江戸前期に存在した本文を伝えており、伝本系統を明らかにするために重要な位置を占める伝本である。

版本の転写本の中でも酒折宮本は、管見の範囲内では唯一の「酒折宮文庫」旧蔵本である。現状では「酒折宮文庫」という蔵書印を他に見いだせない。調査によれば、本居宣長門下で国学を志した酒折宮神社の神主飯田正房の旧蔵書である可能性が高い。飯田正房は広瀬本万葉集の書写に関与した可能性も指摘されており、甲斐国における国学の広まりをうかがわせる写本である。

(3) 『懐風藻』諸伝本の本文系統に関する考察

現存が確認できる『懐風藻』伝本は、新たに紹介した12本も含めると、合計で35本となった。これらの本文を収集し、比較対照させることによって、それぞれの特徴や系統構築につながる伝本同士の関係を考察してきた。まだ考察の半ばであるが、本研究期間に明らかにできたことを報告する。

これまで群書類従系統本とその他の系統本の2系統に大別する小島憲之氏の考え方が通説であった。これは群書類従に、他の伝本にない2首が掲載されていることにもとづく系統分類である。

しかし、本研究の調査によれば、この分類の仕方は適切でない。

群書類従の本文は、屋代本と奈佐本による校合本文であることを識語に記している。奈佐本は未発見だが、屋代本はすなわち不忍文庫本のことである。

不忍文庫本は、広橋本系統の本文に、白雲書庫本系統・天和4年版本系統・塩竈神社本系統の3本の伝本を対校本として校合書入が施された校本である。群書類従の本文は、この不忍文庫本の書入がほぼ全面的に取り込まれた複合本文となっている。つまり、群書類従は、複数の系統の本文によって編集し直された本文であり、特定の系統を継承する本文ではないということになる。したがって、群書類従を一つの系統として立てることは適切ではなく、群書類従での合流に至るまでの伝本系統を明らかにしなければならぬと考えるべきであろう。

『懐風藻』は751年に成立してからの伝来が明らかにされていない。ほぼ全ての伝本が持つ書写奥書によれば、1041年に惟宗孝言に

よって書写され、1342年に蓮華王院宝蔵から見つけられて何者かに書写されたことがわかるが、成立から惟宗孝言書写までの約300年間、惟宗孝言書写から蓮華王院宝蔵本として書写されるまでの300年間、それから江戸初期の書写までの300年間の伝来を示す資料がなく不明である。江戸よりも前の古写本が発見されていないことがその大きな要因の一つである。

江戸期になると、幕府や大名、学者によって書写が盛んに行われるようになる。現存が確認できる『懐風藻』写本はすべてこの頃以降のものである。尾州本(徳川義直) 来歴志本(慶長御写本)などは幕府あるいはその関係者が関与しており、松平本(松平忠房) 榊原本(榊原忠次) 鍋島本(鍋島直條) 脇坂本(脇坂安元)などは江戸初期の所謂好文大名たちが関与している。

これらの書写活動の過程で複数の本文系統が生まれていったことが推定される。したがって、これらの本文を精査して派生過程を明らかにする必要がある。本研究の考察によれば、特に、林家の果たした役割を明らかにする必要があると考えられる。

林羅山「懐風藻跋」によれば、羅山自筆の伝本は確認されていないが、羅山没年の1657年までに2度『懐風藻』を書写している。1665年には鷺峰が中心となって『本朝一人一首』が編纂され、『懐風藻』から64首の作品が採録されている。この本文は鷺峰所蔵の『懐風藻』に拠ると考えられる。しかし、鷺峰所蔵『懐風藻』の転写本である可能性が高い塩竈神社本、田中本、昌平坂本の本文と、『本朝一人一首』の『懐風藻』本文とは、本文系統の相違を示す文字の異同が多く見られるのである。さらに、林読耕齋『本朝三十六詩仙』採録の9首の『懐風藻』作品の本文もまた、林家系統とされる塩竈神社本、田中本、昌平坂本との異同が見られる。大きくは、『本朝一人一首』『本朝三十六詩仙』が編纂された1660年代の本文と、3本の林家系統『懐風藻』伝本が書写された1680年代以降の本文との間に顕著な相違が確認される。ただし、『本朝一人一首』と『本朝三十六詩仙』も本文は一致しない。同時期に異なる系統の鷺峰本と読耕齋本があったのか、それとも依拠した親本は同じでそれぞれ校訂した本文をそれぞれの編纂物に採録したのか、現段階ではいずれとも判断がつかない。

これらは、林家における『懐風藻』継承が単一的なものではないことを示している。

林家では、羅山時代から『懐風藻』を所蔵したと見られるが、その伝本の存在は確認できない。鷺峰時代になって、『本朝一人一首』編纂に使用された鷺峰所蔵本、『本朝三十六詩仙』編纂に使用された読耕齋所蔵本が存在した可能性が指摘できるが、それらが羅山本を継承するものなのかどうかは不明である。鷺峰本と読耕齋本は、編纂物に採用された本文を見る限りでは、同一の本文ではない。

さらに時代が下り、1681年に鷺峰の門人所蔵本を親本とする田中本が書写され、1683年に鷺峰秘蔵本を親本とする塩竈神社本が書写される。この2本の本文の共通性は極めて高い。そしてこの本文は、1797年には存在していたことが確実な昌平坂本との共通性も有している。1680年代以降に書写された鷺峰所蔵系統の本文は、『本朝一人一首』に採録された1660年代の本文と比較して、欠字が補われ、本文が整序されている。

林家の『懐風藻』享受は、特定の系統写本の忠実な転写に留まらず、最善本文の編集を目的とした校訂作業が加えられた可能性が考えられる。古文書を考証学的に検証しながら享受する林家の学問がその背景にあるといえるだろう。

鷺峰は1670年に『本朝通鑑』を完成させる。ここにも『懐風藻』本文が引用されている。1665年『本朝一人一首』とこの『本朝通鑑』の『懐風藻』本文にも相違が見られる。その意味するところについては、今後の課題として考察を継続することにする。

(4) 今後の課題

現存写本の調査はほぼ終了した。今後はまだ発見されていない写本を探索していかねばならない。江戸以前の古写本を見出したいところである。今後は、古筆切にも視野を広げて新たな『懐風藻』資料の発見に努める。

版本書入の調査はまだ完全にできていない。江戸期の受容状況を明らかにするだけでなく、現存しない伝本の本文が書入の形で伝えられている可能性を求めて、書入調査を継続する必要がある。

できるだけ多くの『懐風藻』本文を収集して、精度の高い本文系統を構築することをめざす。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

土佐朋子「『懐風藻』未紹介写本拾遺 早稲田大学図書館蔵黒川文庫本その他」(『早稲田大学古典籍研究所年報』第7号、査読有、2014年、12~20頁)。

土佐朋子「『懐風藻』伝本および本文の諸問題」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』第44号、査読無、2014年、1~16頁)。

土佐朋子「『本朝一人一首』と『懐風藻』林家における『懐風藻』継承」(『古代研究』第47号、査読無、2014年、16~28頁)。

土佐朋子「田中教忠旧蔵本『懐風藻』について 未紹介写本補遺」(『汲古』第64号、査読有、2013年、1~6頁)。

土佐朋子「『懐風藻箋註』と鈴木真年新資料『真香雜記』の「今井舎人」」(『水門 言葉と歴史』第25号、査読

有、2013年、32~47頁)。

土佐朋子「大津皇子「春苑言宴」詩の論 大津皇子が目指した「言宴」」(『古代研究』第46号、査読無、2013年、23~38頁)。

土佐朋子「『懐風藻』未紹介写本三点」(『汲古』第62号、査読有、2012年、1~7頁)。

土佐朋子「『懐風藻』版本書入二種 河村秀根・慈本書入本の紹介と翻刻」(『水門 言葉と歴史』第24号、査読有、2012年、127~140頁)。

土佐朋子「藤原宇合の辺塞詩」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』第42号、査読無、2012年、1~11頁)。

土佐朋子「『懐風藻箋註』引用典籍一覧と考証」(『古代研究』第45号、査読無、2012年、39~63頁)。

土佐朋子「陶淵明と藤原宇合 隠者による隠逸詩の創作」(勉強出版『東アジア世界と中国文化 文学・思想にみる伝播と再創』査読有、2012年、15~34頁)。

土佐朋子「『懐風藻箋註』翻刻」(『水門 言葉と歴史』第23号、査読有、2012年、179~207頁)。

土佐朋子「『懐風藻箋註』と群書類従『懐風藻』」(『早稲田大学古典籍研究所年報』第4号、査読無、2011年、21~32頁)。

土佐朋子「「男とぞ思ふ」 上代における「ヲトコ」と「ヲノコ」」(『東京医科歯科大学教養部研究紀要』第41号、査読無、2011年、1~11頁)。

土佐朋子「「今井舎人」とは誰か 『懐風藻箋註』調査ノートから」(『古代研究』第44号、査読無、2011年、22~32頁)。

[学会発表](計4件)

土佐朋子「『本朝編年録』『本朝通鑑』と『懐風藻』」(古代研究会例会2014年3月13日、於早稲田大学)。

土佐朋子「異文化間におけるディスコミュニケーション」(浙江工商大学・早稲田大学共催国際学術研討会「東アジアにおける筆談の研究」2013年9月13日、於浙江工商大学)。

土佐朋子「陶淵明と藤原宇合」(北京師範大学・早稲田大学共催国際学術研討会「多元視野下的中国文学思想」2010年9月27日、於北京師範大学)。

土佐朋子「西海道節度使をめぐる宇合詩と虫麻呂歌」(上代文学会7月例会2010年7月10日、於二松学舎大学)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土佐朋子 (TOSA, Tomoko)
東京医科歯科大学・教養部・准教授
研究者番号: 00390427